六道骸は完全無欠。
ナルシストだの何だの言われることはあるが、骸本人はその言葉を当然のこととして自負している。見目麗しく、頭脳明晰、術士の力は超一流、それでいて近接格闘も超一級。これのどこに欠点があるだろう。
今、骸が向かい合っている沢田綱吉の如き凡夫には、何を引き換えにしても手に入らない容姿と才能である。
「骸、どうかした？」
コタツにあたってミカンを食べながら、綱吉が不思議そうな顔で骸に声をかける。
優しい色を浮かべた琥珀の瞳も、触ると意外に柔らかいふわふわの癖っ毛も、ころころと変わる表情も、骸の男女の差を超越した美しい顔と、黒絹のように手触りのよい髪と、計算しなくとも完璧な角度で微笑むことのできる唇にはほど遠い。何故か綱吉の笑顔が見たくて沢田家に通ったり、二人きりで過ごしたくて犬や千種やクロームたちの協力によって沢田家の人払いをしてみたり、二人きりになると最近なんとなくいい雰囲気になってちょっと手を握り合ってみたり、たまに二人きりで出かけてコートの影で手を握り合ってみたり、別れ際には指を絡め合ってみたりする仲ではあるが、骸は己が沢田綱吉に対して優位に立っていることを疑わない。
何故なら六道骸は完全無欠だからだ。
しかし――。
「い……いえ、別に……」
綱吉の問い掛けにぎこちなく首をふり、骸はまた俯いた。その額には、コタツと暖房のせいだけではない汗が浮かんでいる。
六道骸は完全無欠。
しかし、その無欠が揺らぐこともある。
「……ぅ、ん……っ」
ただ一点だけ、骸が己の欠点だと思うこと。
（……行きたい）
正座したふとももの上に置いた拳をぎゅっと握り締める。
（トイレに行きたい……！）
六道骸の欠点。
それは、大変トイレが近い体質であることだった。

ついでに言うと、下がユルい。
（うぅ……なんで僕の体はこう……！）
綱吉に悟られないよう、骸はコタツの中でふとももをもじもじと擦り合わせた。
この体質のせいで苦労したことは数知れない。千種や犬の前で恥ずかしい思いをしたことも二度や三度のことではない。が、あの二人とは互いに色々な種類の恥ずかしい場面を目撃し合っているので今更だ。
問題は、目の前の沢田綱吉である。
骸の向かいでのんきにミカンを食べている綱吉は、まさか骸が尿意に苛まれているとは思いも寄らないだろう。これが普通の相手ならば、一言断ってトイレに行けばいいのだが、
（綱吉にそんなこと言うなんて……恥ずかしいじゃないですか！）
まるで付き合いたての中学生カップルのような思考だが、本人は至って真剣である。
（だってここで僕が中座してトイレに行ったら、ああ今骸はおしっこしてるんだなぁ……とか思われるんですよ！　そして僕が帰ってきたら、ああこの骸はさっきおしっこした骸なんだ……って思われるんですよ！　この僕が！　よりにもよって沢田綱吉に！）
内心の興奮のせいでまた尿意が増して、骸はぴくんと肩を震わせた。
「ぅ、ふぅ……ん……っ」
「骸？　……もしかして風邪？」
綱吉が少し頬を染めて聞いてくる。それも仕方のないことで、普通にコタツに当たっているはずの骸が、羞恥に首筋をほんのりと赤らめ、息を荒げて悩ましげに眉をひそめ、時折吐息を漏らしながら身を小さく捩っているのである。箸が転んでもエロいことに結びつけてしまう中学二年生の綱吉には刺激が強い。黒曜中の制服という禁欲的な格好が、逆に妙な隠微さを加えている。
「あ、あの、本当になんでもありませんから……！」
喋ると意識がそちらに取られてしまうので危険だ。ぎゅっとふとももとふとももを閉じ合わせ、尿意の波を耐える。
いっそ帰ってしまおうかとも考えたが、今日は午後から沢田家のいつもの面々が商店街のくじ引きで当たった温泉旅行に出掛けるため、綱吉と二人っきりなのである。

（綱吉と二人だなんて、彼と契約する千載一遇のチャンスです。これを逃すわけにはいきません！　……まぁ、その、綱吉の隙を誘うためには、キ……キ、キスしたりとか、一緒に、お、おおおおお風呂に入るくらいはしなければならない可能性も無きにしもあらずかもしれませんがね？！）

ちなみに、ベタすぎる家族不在の理由は、骸の手配によるものである。くじ引きを主催する商店街の振興会会長を天界道でマインドコントロールしたり、幻術で沢田奈々以外をくじ引き会場に近寄らせなかったり、この温泉シーズンに綱吉以外の全員が泊まれるだけの空き部屋のある旅館を探したり、なかなかの苦労をしたのだった。

さて、帰るのが駄目となると、やはり沢田家のトイレを借りるしかないのだが、さりげなく、かつトイレ以外の理由を見繕って部屋を出ようと隙を探り始めてから、はや三時間。最初は、まぁその内……と思っていた尿意だが、そろそろ危険水域を越えようとしている。

「ふ、ぅ……っ」

既に立ち上がることも危険な状態だ。相当慎重に動かなければ、体勢を変えるはずみで漏らしかねない。

（うう、綱吉が一時的にこの場から消えてくれればいいのに……！）

無茶なことだとは分かっているので、本気ではない。しかし、そう思わずにいられない。

ところが。

「うあああああん！　ツナぁあああああ！」

部屋に転がり込んできたのは、沢田家の居候の一人、牛柄の五歳児だった。己の尿意に気を取られ、気配を察せなかった骸は驚きのあまり体を震わせた。

（あっ、しま……っ）

気を抜いてしまいそうになり、ぎゅっと両手で股間を掴む。綱吉に抱きついた子牛は何やら泣き喚いているが、骸はそれどころではない。

「くふ、ぅ……っ」

（あ、危なかった……）

危機を乗り越えた安堵と、それでも一向に収まらない尿意に、じんわりと涙が浮かぶ。

「ランボ、みんなと下で旅行の準備してたんじゃなかっ

たのか？」
「だってだって、リボーンがぁ！」
（うう、もう本当に限界です……。どうにかしてトイレに行かないと……）
「やだぁー！　ツナもランボさんたちと一緒に行くんだもんね！」
「だーかーら、オレは行けないのっ！　補習があるし、ちょうど一人だけ人数オーバーなんだから」
「う……うぅ～！」
（しかし、どう切り出せば……おトイレ？　お手洗い？　さすがに御不浄とか言ったら引かれますよね？）
「あっ、馬鹿ランボ、十年バズーカは……！」
常時ならば鼻で笑って避けただろうその攻撃に、骸は気付いてすらいなかった。顔を上げたときにはもう遅い。

「骸！　避けろ！」
「……え？」

その場から突然消えたのは、骸の方だった。

「うぐ……っ！」
尻を打ち付ける鈍い衝撃が下半身に響き、骸は全身を強張らせた。尿意の波が押し寄せ、制服の上からぎゅうっと股間を押さえる。
――じわ……。
（あ、だ、駄目……！）
尿道が熱くなる感覚に、骸は必死でふとももを締め付けた。
「う、くぅ、う……っ！」
足の指先をきゅっと丸め、ぶるぶると背筋を震わせる。少し漏れたかもしれないが雫程度だ。制服の上からでは分かりはしない。
（も、もう駄目かと思いました……）
大きな波をやり過ごして、骸はやっと息をついた。と言っても、限界間近に変わりはないので気を抜くことはできない。
「……骸？」
それからようやく、今の状況を思い出した。
「さ、沢田……綱吉？」
目の前に座っているのは、見たことはないのに、酷くよく知っている感じを受ける男だった。
あちこち跳ねた茶色の爆発頭、優しそうで真ん丸な琥珀の瞳、見る者に安心を与える柔和な顔つき……それでいて、力強さを感じるシャープな頬、強い意志の感じられる強い眉。
まるで沢田綱吉が十ほど歳を取ったような男である。
「うん、オレ、沢田綱吉だよ」
目の前の男はあっさりと頷いた。
何より、骸の本能がこれは現実だと教えている。疑り深く慎重な骸だが、こと沢田綱吉に関しては本能のままに行動するようにしている。彼の持つ超直感に反応でもしているのか、大抵はそれが正解のことが多い。
「お前、十年バズーカに当たったんじゃないの？」
「十年バズーカ……あれが……」
ボヴィーノファミリーに所属するあの子牛が十年バズーカを持っているという話は綱吉から聞いたことがあった。しかし、まさか本当にこんなふざけた力を持っているとは夢にも思っていなかった。
「あの、本当に十年前の骸様……？」
横から話しかけられて、ようやく骸はこの場にもう一

人いることに気付いた。
骸と綱吉の横に立つのは、隻眼の女性である。この綱吉と同じく二十代半ばに見えるが、どこか少女めいたあどけなさを秘めた美しい女性だった。
「クローム……髪を伸ばしたんですね」
歳を取ろうとも髪を伸ばそうとも分かる。骸とクロームの間には、犬や千種、綱吉とも違う、二人だけの繋がりがあるのだ。
「骸様……お久しぶりです……」
目尻に涙を浮かべて破顔するクロームに、骸も頬を緩ませた。
あらためて、現状を把握する。
骸と綱吉は、小さなテーブルを挟んで座っている。テーブルの上にはケーキやスコーンなどの茶菓子に、ガラス製のティーカップ。その横に、ガラスのティーポットを抱えてクロームが立っている。
そして、体を包むのは、息苦しいほどに熱くて湿った空気だ。
「ここは……温室？」
生い茂る緑の隙間からは、ガラスと曇天が覗いている。
「そうだよ、この温室はクロームが全部世話してるんだ」
綱吉の言葉に、クロームが恥ずかしそうにはにかむ。
「蘭が綺麗に咲いたから……」
言われて見れば、白や薄紫の豪奢な花が咲き誇っている。骸はあまり花の種類は知らないが、冬のさなかには贅沢な光景だということは分かった。
「それで、オレと骸がクロームのお茶会のご招待を受けたってわけ」
それで二人向かい合ってお茶をしているということか。十年前と同じ相手と、ほぼ同じ構図で過ごしていたとは、なかなか奇遇なことである。
（つまり、僕と綱吉はクロームに呼ばれて一緒にお茶をする仲、だと……）
十年前と進展しているのかしていないのか分からない。だが、少なくとも、険悪な仲ではなさそうだ。
「あの、骸様、お茶どうぞ」
「え」
何か言う前に、クロームが骸のカップにお茶を注ぐ。ガラスのティーポットの底には苺と氷が沈んでいる。

「これ、この温室で採れた苺で……フルーツティーにしてみたんです」
微笑むクロームは、自分の育てた苺を自慢したいのだろう。相手はクロームの敬愛する骸、しかも十年前の骸という、これを逃せば二度とない相手である。
当然飲んでやるべきである。断るという選択肢は無い。
が、しかし、
（これ、アイスティーですよね……）
骸の額に油汗が浮かぶ。この暖かい温室の中で飲むなら美味しいに違いない。が、骸にとっては拷問だ。すでに膀胱は目一杯で、あと一滴だって水分を取る余裕はない。その上冷たい飲み物である。
「あ、美味しい」
先に口をつけた綱吉がクロームのお茶を褒め、クロームは恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに笑う。そして、骸に期待をこめた視線を送る。綱吉も、早く飲んでやれよ、という笑顔を向けている。
（……ええい、僕も男です！）
勢いよくカップを掴み、一気に煽った。
「……何も一気飲みしなくても」
綱吉とクロームが目を丸くしているが、骸はそれどこではない。キンキンに冷えたアイスティーを一気に飲み干すと、冷たい液体が食道から胃に滑り落ち、そのまま膀胱に突き刺さるような錯覚に陥る。
「……ぅ、お……お、美味しいです、よ……」
搾り出した声は震えていた。カップを持たない左手は制服の上着ごと股間を押さえ、ぴっちりと閉じたふともを擦り合わせる。豪雨の夜に決壊寸前の堤防を死守する心境だ。
目にうっすらと涙を浮かべ、青くなって震える骸の様子に、クロームも何かおかしいと気付いたらしい。心配そうに覗き込んでくる。
「骸様、どうかしたんですか……」
「骸」
しかし、骸が言葉を返す前に、綱吉が立ち上がった。立ってみるとますます十年前との差異が明らかになった。成長途中にしても低かった背は伸び、今の骸よりも高いだろう。品の良いダークカラーのスーツに包まれた体は、服の上からでも均整の取れたしなやかな筋肉が見てとれる。こんな状況でなければ、頬を染めて見惚れていたか

もしれない。
「気分が悪いみたいだ。オレが医務室に連れて行く」
そっと骸の手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる。
「あぐっ、ぅ……」
地に足をついて腰を浮かせたとき、ビリリと電流が流れるように尿意が瞬間的に爆発し、またじわりと下着を汚してしまった。
（だ、大丈夫、これくらいならバレない……）
綱吉の胸にもたれかかるように優しく肩を抱かれる。思わず体重を預けると、腰に手が回り支えてくれた。
「ごめん、クロームはここを片付けてくる？」
「分かったわ、ボス。骸様のことお願い」
綱吉に抱きかかえられるようにして、骸はクロームの温室を後にした。

＊＊＊

蒸し暑い温室にいたせいで、冬の外気が殊更冷たく感じる。冷気が足元から這い上がり、体の芯まで冷やしていく。先ほど飲んだアイスティーが下腹部でちゃぷちゃぷ揺れているような錯覚さえ感じる。
（くう、ぅ……無理、もう無理……！）
綱吉に支えられて庭をじりじりと歩きながら、既に骸の頭の中は尿意一色だった。古色蒼然とした城の周りに広がる手入れされた庭、という、未来の綱吉と骸に関してかなりの情報量を含む景色の中を歩いているのだが、骸にそれを認識する余裕はない。
（は、恥ずかしいですけど、やはり背に腹は変えられません……！）
意を決して、骸は口を開いた。
「あの、トイ」
「トイレだろ？」
ぎくりと立ち止まって見上げれば、綱吉は悪戯っぽい笑顔を浮かべていた。
「付き合い長いもん、分かってるって」
「あ、あうぅ……」
かっと耳まで赤くなる。十年後の綱吉は骸の体質を知っているのだ。
「……では、その……トイレに……」
きゅうっと綱吉のスーツの裾を掴みながら呟く。羞恥

で燃え上がりそうに顔が熱いが、知られているならばもう隠す必要はない。むしろ事情を分かってくれているなら好都合だ。
しかし、綱吉はにっこりと笑って言い放った。
「やだ」
「……は？」
一瞬尿意も忘れて綱吉の顔を凝視すれば、青年はますます笑みを深くする。
「いやー、最初はちゃんとトイレに連れてってあげようと思ってたんだけど、十年前の骸があんまり可愛いからさ」
腰を抱いていた手がするりとシャツの裾から入ってくる。
「つ、つなよ、し……」
「だって骸がお漏らしするとこ、すっごく可愛いんだもん。ちっちゃい子みたいに泣きながらごめんなさいごめんなさいって謝って」
頭の中が真っ白になる。
（ぼ……僕、は、綱吉の前で漏らしたことが……？）
「十年前の骸が漏らすとこもそりゃ可愛いんだろうなぁと思うと、な？」
「ひっ、ぃ、い……！」
シャツの中に入ってきた手が素肌を撫で回す。腹を押される感覚に、骸は内股になって立ち止まった。もう一歩でも動いたら本当に漏らしてしまう。
（そんな、綱吉の前でお漏らしなんて、そんなの絶対に嫌です……！）
が、綱吉は構わず骸を引っ張る。骸の状態を分かっていてやっているのだ。
――ちょろ……っ。
「ぁ、や、だぁ……っ」
尿道に熱いものがこみ上げ、下半身から力が抜けていく。下着を濡らすのは既に雫どころの量ではない。モスグリーンの制服の股間が、じわじわと色を濃くしている。
「だ、駄目です……駄目……！」
綱吉の胸を押し身を離す。伸びてくる腕から逃れようと後ろに下がり、
「あ」
バランスを崩し、地面に尻餅をついた。
「――――あ」

下半身に衝撃が響く。
ぱかりと股が開き、股間の拘束が緩む。
「あ……」
――ぷしゃあああっ！
一度決壊したものを塞き止めることはできない。制服のズボンに吸収しきれなった尿が勢いよく噴き出し、石畳の上に湯気の立つ水溜まりを作っていく。
「あ、あ……」
我慢に我慢を重ねた後の開放に、頭の中が真っ白になった。舌をだらりと突き出して体を弛緩させ、射精よりも強烈な快感に酔いしれる。
「骸」
が、我を忘れたのは一瞬のことだ。名前を呼ばれ、状況を思い出す。
「つ、つなよ……」
見上げれば、慈しむような優しい笑顔を浮かべた綱吉と目が合った。瞬時に羞恥が爆発する。
「いや……見ないでくださいぃい！」
子供のようにお漏らしするところを、沢田綱吉に見られている。
（止まって、早く止まってぇ……！）
最初のような勢いはなくなったものの、溜め込んだ尿の排出はなかなか終わってくれない。股間を押さえても、水溜りは大きくなるばかりだ。
「見ないで……見ないでくださいぃ……」
排尿の快感と、焼け付くような羞恥、死にそうな屈辱感が綯い交ぜになり、目尻からぽろぽろと涙まで零れだす。
「かわいいよ、骸」
「やぁあ……やだぁ……」
それからまだ暫く、うっとりと微笑む綱吉と見つめ合いながら、ちょろちょろと尿を漏らし続けたのだった。
その後、綱吉の上着に包まれた骸は風呂場に運ばれたのだが、素っ裸にされたところで時間切れ、十四歳の綱吉の下に戻った……のは、また別のお話。